

## 聖木曜日（主の晩餐の夕べ）の説教

金 大烈 神父 2011年4月21日（木）

《仕えるもの、汚れた足を洗うものになりましょう》

主の平和。ご自分のことを考えて、「わがままではない」と思う人は手をあげてください。人と比べて、「私はそんなにわがままではない」と思う人はいませんか。正直に手をあげてください。誰も手をあげませんが、私はこんなにわがままなグループと一緒にいるのでしょうか。（笑）

結論を先に申し上げます。私たちはみんなわがままです。正しさの前では、全ての人間はわがままです。神様のみ旨の前では、みんなわがままです。これを否定できる人は、この世にはいません。それをよくご存知なのがイエス様です。しかしイエス様は、このわがままな私たちのためにご自分の命を捧げられたのです。

さあ、今日の福音(ヨハネ 13・1 - 15)にも書かれているのですが、イエス様は、ご自分が「十字架の道を歩まなければならないのだらう。」と思い、愛する12人の弟子たちに「一緒に食事をしよう」と呼びかけます。そしてそこで遺言を残されます。今日の福音には書かれていませんが、第二朗読(一コリント 11・23 - 26)には「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい。」という遺言が書かれています。

その食事が終わり、イエス様は立ち上がります。そして、タライに汲んだ水で12人の弟子たちの足を一人一人洗います。弟子たちの中で一番真面目だと言われるペトロは、「私の足など絶対に洗ってはいけません。」と偉そうな言い方をします。するとイエス様は、「私があなたを洗わなければ、あなたと私は何の関係もないものになってしまう。」とおっしゃいます。それを聞いたペトロは「それならば、体全体を洗ってください。」と言います。やはりわがままが表れています。しかしイエス様は、「体を洗った者は、全身清いだから、足だけ洗えばよい。」とおっしゃいます。

ではなぜイエス様は、体全体の中でわざわざ足を選んで洗ったのでしょうか。足が象徴するものは何なのでしょう。「私はあまり汗をかかないから、一週間くらいは洗わなくても臭くない。」という方がいらっしゃるでしょうか。ミス・ジャパンやミス・ワールドに選ばれた美人でも「足を洗わなくても、良い薫しかしません。」ということはありません。つまり、イエス様が足を選んだのは、仕方なく汚れてしまう人間の本来の姿を表しているからです。毎日いくら洗っても、洗っても、汚れてしまう足、その汚れは、いくらきれいにしようとしても仕方なく罪に陥ってしまう人間の弱さを表しています。ですからイエス様は、人間の体の中で足を選んだのです。そして、洗ってくださったのです。

イエス様は食事をする時にパンを裂いて、「これをとって食べなさい。これはあなたがたのために渡される私の体である。」とおっしゃいます。そしてぶどう酒を差し出しながら「これを受けて飲みなさい。これは私の血の杯である。」とおっしゃいます。そしてその後すぐに、一番愛する弟子たちの足を洗う姿を見せました。つまり、イエス様の御体、御血をいただく私たちがいつも意識しなければなら

ないのは、『愛の実践』だということです。

汚れた足を見たら、「汚い」「臭い」と思うのが私たちの自然な反応です。しかしイエス様は、その汚さ、汚れを裁こう、責めようとするのではなくて、それを清めようとするのが弟子たちの役目であるとはっきりおっしゃっています。私たちの目にも、信仰を持っていない人の目にも、汚いものは汚いです。しかし、信者でない普通の人が見た時の反応と、信者である私たちの反応は違います。「汚いから避けなければならない、なくさなければならない。」と思うのがこの世の普通の考え方です。しかし私たちは、その汚れたものが目に入っても避けようとすることはできません。逃げようとすることもできません。「汚い。汚い。」と言って裁くこともできません。その汚れた足を洗おうとするのがイエス様に命じられた使命なのです。

先ほどの質問では、わがままではない人はいませんでした。つまり、お互いの汚い所がよく見えるはずですが、なぜならば、わがままだからです。天使ではないのです。何かしようとする時、関わろうとする時、ミサに与る時、どうしても人の悪いところが見えてしまいます。「あの人は気軽にご聖体をいただくが、神様から罰を受けるかもしれない。」などと思われることがあるかもしれません。しかしそれは絶対に望ましい態度ではないことを意識しましょう。それを意識しなければ、信者でない人とどんな差があると言えるのでしょうか。皆様には必ず薫がなければいけません。くさい臭いをなくす薫、その薫になることが私たちの役目ではないでしょうか。

第二朗読の最後にはこのように書かれています。「このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。」ミサのまことの意味がこの箇所を表れています。ミサというのは、ご聖体をいただくこと、御血をいただくことです。それによって「主の死を知らせる」ことが、一番根本的なミサの意味です。では、「主の死を知らせる」とはどういう意味でしょうか。「主が死にました。」と知らせることでしょうか？いいえ、そうではありません。『主が何のために、どのように死んだのかを、はっきり自分の行動で示しなさい』という意味です。つまり、『キリストの薫を皆に広めなくてはいけない』ということです。『なぜイエス様が死ななければならなかったのかを私たちがはっきり理解して、そのような生き方をしないさい』という意味でしょう。

私だけではなく、たくさんのカトリックの聖人がみんな同じように話した内容があります。それはご聖体、御血に対しての信仰、信心です。ミサに対しての深い心です。私たちには限りがあります。その限りを乗り越えられる唯一の力は、イエス様の御体、イエス様の御血、すなわちイエス様のみ旨からいただきます。ですから、絶対にミサを軽んじないでください。「与らなくても良いのだろう。」「来週行けばよいだろう。」「赦しの秘跡を受ければよいのだろう。」くらいのもではありません。いつか皆様にも、「このミサのために命をかけられる」という告白ができるように聖霊の働きを願います。

さあ皆様、お互いに仕えるものになりましょう。難しいことです。しかし仕えるものになろうと思ひ、その恵みを願ひましょう。

ありがとうございました。